

## 東アジアにおける古代音楽の探求と復元 —最古の琴(きん)の楽譜、国宝『碣石調幽蘭第五』をめぐる 音楽文献史学的研究—

山 寺 美紀子

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 研究院研究員

### 1 研究の背景と目的

本研究は、現存する最古の「<sup>きん</sup>琴」の楽譜であり、東アジア現存最古の楽譜の一つと目される『碣石調幽蘭第五』を主な研究対象とし、その歴史的背景と諸相、音楽的内容を解明することにより、古代東アジア漢字文化圏における音楽の歴史の一端と古代音楽の実態を明らかにすることを、試みたものである。

「<sup>きん</sup>琴」(qin)とは、「古琴」「七弦琴」とも称される、中国紀元前を起源とする楽器であり、所謂「<sup>ことう</sup>箏」とは全く別個の楽器である。現在まで伝承され、ユネスコ無形文化遺産に登録されている。<sup>きん</sup>琴は、孔子が愛好したと伝えられたことなどから、君子の修養のための楽器として儒家に尊重され、音楽の長、礼楽の器として、宮中雅楽の楽理の基準となり、その一方で、民間から生まれた音

楽ジャンルの伴奏・合奏楽器として発展した。また、老荘的道家思想とも結びつき、隠逸思想の象徴として、さらには教養として嗜むべき「<sup>きん</sup>琴棋書画」の筆頭として、単なる楽器を超越した存在として、東アジア歴代の知識人たち(陶淵明・白居易・蘇軾・朱熹など)に愛好されてきたものである。<sup>きん</sup>琴は、中国の学問・思想と共に、東アジア全体に広く伝播し、日本では古くは「<sup>きん</sup>きんのこと」、朝鮮半島では「<sup>いん</sup>徽琴」などとも呼ばれてきた(以下「<sup>きん</sup>琴」と表記するものは、全てこの「<sup>きん</sup>琴」を指す)。なお、日本において、<sup>きん</sup>琴は奈良時代には伝えられており、法隆寺に唐の開元12年(724)の作とみられる<sup>きん</sup>琴が残存し(現在東京国立博物館所蔵、国宝。図1参照)、正倉院にも<sup>きん</sup>琴が保管されている(図2参照)。



図1 法隆寺旧蔵、東京国立博物館所蔵「七弦琴」(弦は欠損)

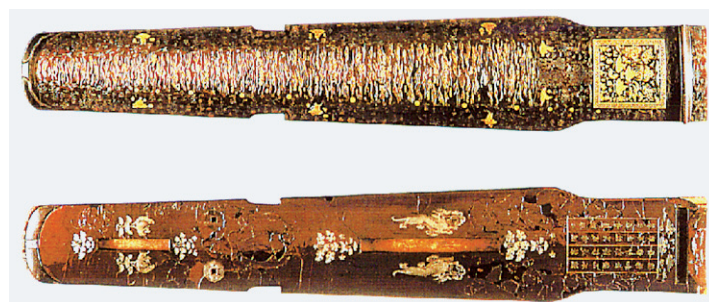


図2 正倉院宝物「金銀平文琴」(上：表、下：裏、弦は欠損)

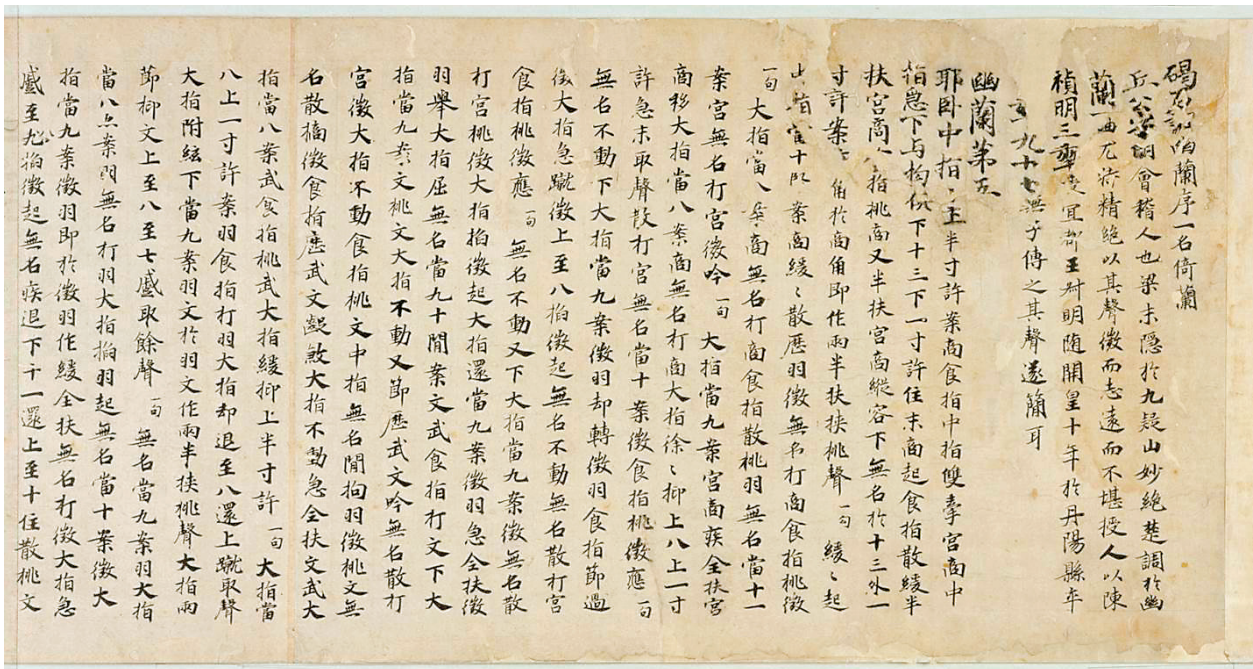


図3 東京国立博物館所蔵『碣石調幽蘭第五』（巻頭）

『碣石調幽蘭第五』（縦 27.4cm、全長 423.1cm、卷子本一軸、現在東京国立博物館所蔵、国宝。図3参照。以下、『幽蘭』と略記）は、中国南北朝6世紀末頃に伝承された琴の曲を、すでに失伝した「文字譜」と呼ばれる記譜法（曲の弾き方を文章で表した奏法譜の一種）によって記したものである。書写年代は唐代7世紀から8世紀前半とされ、則天文字が見える巻頭上部の補筆部分も、唐代の書写と判定されている。日本に伝存し、江戸時代に、儒者の荻生徂徠によってその価値が見出された。

『幽蘭』は、琴の現存最古の楽譜であるだけでなく、現存する唯一の「文字譜」による琴譜でもある。また、東アジアに残存する他の書写年代に近い古楽譜と較べても、『幽蘭』は情報量が多いなど、楽譜資料としての価値が高く、東アジア音楽史上、非常に貴重な資料である。しかし、日本では、昭和初期以降に琴の演奏伝承がほぼ断絶したこともあり、これまで『幽蘭』を専門的に取り上げた論考はなく、基礎的な調査も立ち遅れている状況であった。一方、琴の伝承が続く本場中国では、清末に『幽蘭』の影写本が紹介されて以来、その研究が多く行われてきたが、大半は、創作的要素を加えた演奏を目的としたものである。そこで、本研究では、『幽蘭』を古曲再興の材料としてではなく、学術的に音楽史を研究する資料として、その価値を発揮させる必要があると考え、まず『幽蘭』に対する周辺資料の発掘を含む基礎的な調査

を行った上で、その内容と来歴について研究を行った次第である。

## II 研究内容

本研究での主な成果とその研究方法は、次の4点に示すとおりである。（以下は、拙著『国宝『碣石調幽蘭第五』の研究』（北海道大学出版会、2012年）にもとづく）。

### 1. 『幽蘭』の来歴の解明

本研究では、『幽蘭』に記譜された曲を演奏・伝承した人物とその周辺について考察した。特に、『幽蘭』の序文にこの曲を伝授されたと記す「宜都王叔明」という人物が、中国南北朝期の陳朝第四代皇帝宣帝の第六子であった陳叔明（558～611）であることを、『陳書』など他の文献と彼の墓誌（1936年河南省洛陽出土）から確認した。

日本における『幽蘭』伝存の軌跡については、後水尾天皇（1596～1680）が楽家の狛氏に下賜した後、荻生徂徠（1666～1728）が『幽蘭』と出会った経緯と時期を推定し、その後の江戸末から明治期までの『幽蘭』の行方の変遷を辿った。また、『幽蘭』影写本及び関連する資料の近代中国への伝播についても、不明であった点を明らかにした。

## 2. 荻生徂徠による『幽蘭』研究の実態を解明、新資料の発見

荻生徂徠による『幽蘭』研究の実態を明らかにするために、本研究では、関係する諸写本の調査を行ったところ、これまでに知られた著書とは内容の異なる新資料の存在することが判明した。それは、現在荻生家に所蔵されている徂徠自筆稿本であり、『幽蘭』について詳細に解説・解説したものである。その内容に基づき、本書こそが、徂徠の著述目録に「幽蘭譜抄」と載せる著作に該当するものと指摘した。

そして、その自筆稿本、及び荻生北溪(徂徠の弟)の校正と記す写本等を併せて考察した結果、徂徠が古楽の楽理研究に基づいて、『幽蘭』の曲の調弦法を具体的に導き出していたこと、また解説した曲に歌辞を付け、独自にリズム処理を行い、復元演奏を試みていたことなど、一連の研究の詳細が判明した。

## 3. 現存最古の琴の指法書『琴用指法』の再発見とその解説

徂徠の著述には、後水尾天皇が『幽蘭』を楽家に下賜した際、琴の演奏法や指遣い(「指法」と称する)について解説した指法書も共に下賜された、と記録する。その指法書『琴用指法』後水尾本は、近代以降、所在が不明であったが、本研究ではそれを再発見し、主に紙背文書とそれに関する記録に基づいて、現在彦根城博物館所

蔵の卷子本一軸(井伊家史料V633、図4参照。以下「彦根城本」と略記)が後水尾本であると判定した。

さらに、その内容を精査した結果、彦根城本(=後水尾本)は、『幽蘭』とほぼ同時代の、隋・唐までの指法書を幾つか併せ写したものであり、現存する最古の琴の指法書であることを確認した。また、『琴用指法』彦根城本に載せる指法の多くが『幽蘭』の楽譜中にも現れるため、『幽蘭』解説の参照にするため、彦根城本の翻刻と現代語訳を行った。

## 4. 『幽蘭』の解説、指法の検証と調弦法の分析

『幽蘭』の楽譜(文字譜)の部分は二百行以上にわたる。本研究では、『幽蘭』の全楽譜に対する翻刻と解説(現代語訳・訳注)を行い、『琴用指法』彦根城本を始めとする文献資料を参照して、楽譜に現れる40種ほどの指法を具体的に検証した。その結果、『幽蘭』には、今日の演奏慣習には無い、余韻の処理まで詳細に指示するような、複雑で多様な奏法があった可能性などが窺えた。また、調弦法(各弦の音程関係)については、楽譜に記された弦を押さえる指の位置と弦名をデータとして、音律の計算方法によって分析したところ、一つの調弦法の可能性を導き出すことができ、中国語圏の研究における昨今の定説を見直す余地があるという結果となった。ただし、本研究の分析においては、各弦間に齟齬する結果も見られたため、結論を出すには至らなかった。

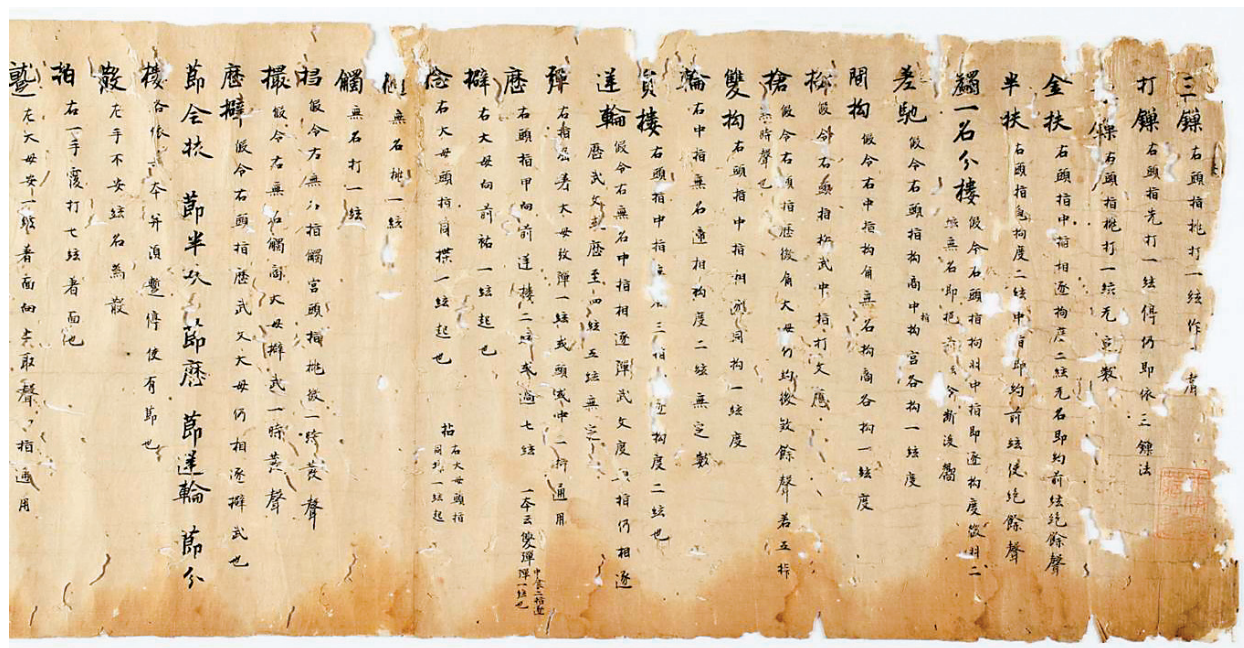


図4 彦根城博物館所蔵『琴用指法』(巻頭)

### III 課題と展望

#### 1. 『幽蘭』の未解決問題及び琴をめぐる諸相から、古代音楽の新たな知見を導く

『幽蘭』には、未解決の問題が残されている。その一つは、上記の調弦法に関する問題であるが、これを解明することは、当時、琴と共に合奏・歌唱されていた音楽の楽理、つまりは漢魏晋南北朝時代の調の実態を探る重要な手がかりになると考えられる。当時の音楽の実像を直接導き出せるような資料が、『幽蘭』の楽譜のほかにはほとんど残存しないという実情を鑑みても、発展性を有するこの問題に関して研究を続け、それを起点として古代音楽の楽理を探求していきたい。

また、『幽蘭』の来歴にも、不明な点が多く残されている。今後、『幽蘭』及び琴をめぐる諸相を調査・考察していくことで、これまで見過ごされがちだった職業的専門的音楽家以外の者による音楽の有り様や、東アジア漢字文化圏における学芸文化交流の様相を明らかにしていきたい。

#### 2. 日本に残存する中国古代音楽研究の遺産を活用し、さらなる音楽史の探求へ

古代東アジア漢字文化圏における知識人たちは、治世の追求のために、理想とされる中国古代聖人の楽につい

て探求してきた。特に日本の江戸時代は、中国古代音楽（琴を含む）とそれを継承する日本雅楽の唐楽に聖人の楽が遺存するとみなされ、それらに対する研究が、荻生徂徠を始めとする儒者や和算家、医家、諸大名等によってさかんに行われた。このような江戸期の研究は、思想的展開としての音楽研究ではあるが、実在する音楽を対象としたため、今の音楽学及び音楽史の分野における楽理研究の先駆けとも言えるだろう。

そこで、今後は、楽理に関する江戸期の文献資料をできるだけ広く調査すると共に、江戸時代の研究業績という遺産を活用し、それらを先行研究として参照することで、中国古代音楽史の研究を進めることはできないか、とも考えている。これは、長期的な展望であり、希望でもある。

### 謝 辞

多くの研究者を支援され、東洋学の大家たちによる名著「カルピス文化叢書」を刊行された、伝統ある公益財団法人三島海雲記念財団から、このたび、第2回三島海雲学術賞という栄誉ある賞をいただきましたことを、深く感謝いたしております。財団関係者の方々、選考委員の先生方に、心より御礼申し上げます。